

幕末屈指の道場開いた斎藤弥九郎 幕府、新政府の能吏として活躍

氷見市教委生涯学習・スポーツ課主査

小谷 超

時代は幕末。江戸には多くの剣術道場ができ、それぞれ隆盛を誇った。なかでも、江戸三大道場と呼ばれて特に人気を集めた道場には、北辰一刀流千葉周作の玄武館、鏡心明智流桃井春蔵の士学館と並んで、神道無念流斎藤弥九郎の練兵館がある。一説には「技は千葉、位は桃井、力は斎藤」という評があったとされる。

この練兵館の斎藤弥九郎は加賀藩の出である。



明治期に撮影された斎藤弥九郎の写真
(氷見市教育委員会提供)

剣豪に求められたものはそれまでの「剣の達人」という戦士としての能力だけでなく、剣により到達した境地をもって国づくりをする政治家としての先見の明や行動力、あるいは教育者としての人づくりの能力であった。

弥九郎の練兵館が千葉周作の玄武館と比肩するほど名を高めたのもまさにその点にあり、弥九郎の魅力に迫る時、特筆すべき点も同様と考える。

1798（寛政10）年、越中国射水郡仏生寺村（現・氷見市仏生寺）の農民新助の長男として生まれ、江戸へ出て剣術を修め、練兵館の道場主として多くの弟子を育てた。その中には、長州藩の桂小五郎（のちの木戸孝允）や高杉晋作、品川弥二郎、大村藩の渡辺昇ら幕末維新に活躍した多くの志士たちがいた。

近世から近代へと向かう時代の大きな転換期、

よって弥九郎については剣の技量をあれこれ述べるよりも、幕末という時代とどのようにかかわりともに生きた志士たちにどんな影響をもたらしたかという側面に重きをおいて詳述したい。

江戸へ出て撃剣館に入門

1811（文化8）年、13歳となった弥九郎は高岡にいた。薬種商や油屋で奉公していた弥九郎は、加賀藩主の参勤交代の行列を目的の当たりにし、武士を強く志した。さらに行商人から江戸の繁華なる様子を聞くにつけ、立身を遂げたいと意を決し、単身江戸へ出たのである。

親戚筋に当たる江戸の土屋家を頼ってしばらく滞在した後、旗本の能勢家に住み込みして懸命に働き、夜は読書に励んだ。その間、一切床につくこともなく、眠気があれば机に拳を置き、仮眠をとっただけ。寒い夜には竹刀を振って体を温め、再び机に向かったという。いささか脚色めいたところも感じる伝承だが、その後の驚異的な成長を

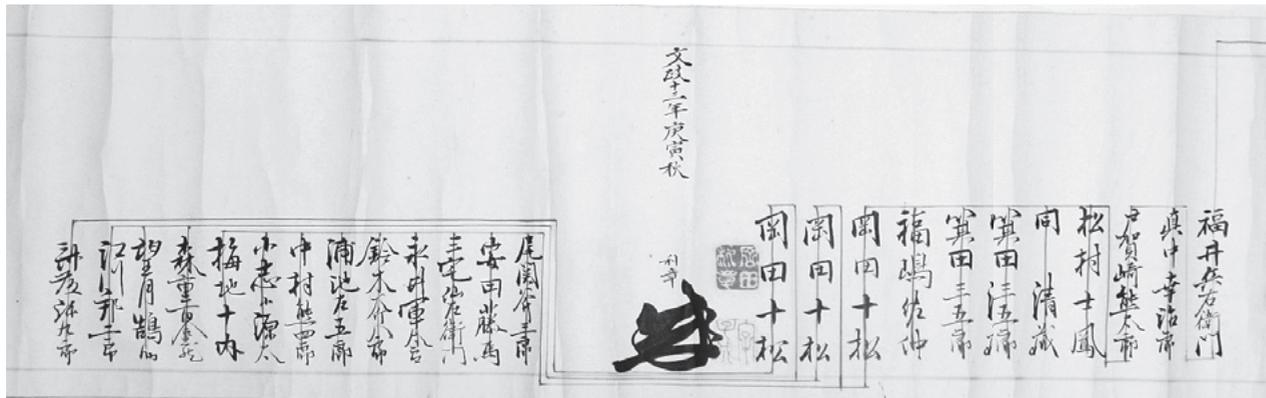
見れば、こんなエピソードが生まれて不思議でないほど強靱な精神力の持ち主だったことがうかがえる。

弥九郎の非凡な才を間近で見て取った能勢氏が入門を勧めた剣術道場が神道無念流岡田十松の撃剣館であった。道場主岡田は22歳で印可され武者修行で名を高めた猛者である。撃剣館という名からもその剣の激烈さが伝わってこよう。この道場ではちに新撰組二番隊長を務める永倉新八も学んだ。

29歳で自分の道場を開く

弥九郎は撃剣館で十数年にわたり修行に励むが、実はそのころについては詳しく分かっていない。ただ、この間に、その後の弥九郎の人生にとって

大きな影響を与え、2人の人物が撃剣館に入門してき



斎藤弥九郎が受けた神道無念流免許（水見市教育委員会提供）

職を継いだ江川が弥九郎を自分の側近として登用したのである。葦山代官は東国にある幕府直轄の天領を監督するために設置された役所で、江川家は代々その職にあつた。父の英毅時代は相模、伊豆、甲斐、武蔵にある天領のうち、7万2000石余を支配して

た。1人は水戸藩の藤田東湖である。水戸藩9代藩主徳川斉昭の側近として改革推進に辣腕を振った水戸学大成者であり、弥九郎と水戸藩とのつながりを深めるキーパーソンとなる。

また、もう1人はのちに葦山代官となる江川英龍である。この縁により弥九郎は、江川の父英毅の経済的支援を得て、江戸飯田町組橋詰の借地に自らが経営する道場練兵館を開く。弥九郎29歳のことであった。

練兵館は文武両道を重んじ、弥九郎自身が兵学を講じることや、毎日の日課に素読を取り入れるなど、学問を極めて重視した。この徹底した人格教育が優れた人材を世に送り出す要因になったといえよう。

葦山代官の側近に登用

弥九郎は30代前半、道場経営に全力を注いだ。その状況が江川の父英毅の死により一変する。1835（天保6）年、父が務めていた葦山代官

いた。代官は、直轄領の年貢の徴収、紛争処理、治安維持や罪人の処罰、村方への貸付金の運用などの業務をこなす必要があった。

弥九郎は、江川家において江戸詰の書役という役職に任じられ、これらの業務の一部を他の家来とともに行った。

江川が期待したのは、道場主としての人脈とそれに伴う情報収集能力の高さであった。江川については後でも触れるが、窮地に立った幕府が全面的に頼った俊英である。その人物に見込まれた弥九郎は見事に期待に応え、要人との交渉役、隠密裡に事を運ぶための諜報役など主に裏方の重要な役割を担った。その活躍は多岐にわたるが、誌面を割くため、ここではその一部を紹介するのとどめる。

①大塩平八郎の乱が発生した後、江川からその顛末についての調査を命じられ大坂へ赴く。その後、その残党が甲斐国に来たという噂があったため、江川とともに刀剣商の身なりで密かに視察した（1837年）。

②異国船に対応するため、江戸湾内の防衛強化が必要であり、幕府は江川らに湾岸の測量と大砲設置場所について調査を命じた。弥九郎はその調査に同行するとともに、最新の測量技術や外国の事情に詳しい洋学者の渡辺崋山に接触した(1838年)。

③西洋砲術に詳しい高島秋帆が江戸へ来て、大規模な軍事演習を行った際、江川は弥九郎ら8人の家来をその演習に砲術隊として参加させ、西洋砲術を学ばせた(1841年)。

つまり江川は、重要な局面にはことごとく弥九郎をあたらせ、激しさを増す世の中の動きに目を凝らしていたのである。

水戸藩士から厚い信頼

撃剣館の同門であった藤田東湖、そして水戸藩9代藩主徳川斉昭との関わりについても触れておこう。前出の大塩平八郎の乱に関し、大坂の状況について、弥九郎は東湖にもその状況を報告し、

あろうし、立場上つらい状況だったに違いない。ただ、このことから如何に水戸藩の信頼に厚かったかが分かる。

長州藩士が次々練兵館に入門

時代は弥九郎の晩年にかけて、さらに大きく揺れ動いていく。1847(弘化4)年、弥九郎50



斎藤弥九郎の息子たち。前列左が新太郎で、明治期に撮影(氷見市教育委員会提供)

東湖はその詳細なメモを「浪華騷擾記事」として斉昭に示した。現在この記事は、大塩平八郎の乱研究の基礎史料の一つとなっている。

その後、斉昭自ら弥九郎を知るところとなり、1838(天保9)年合力扶持が給された弥九郎は、3年後の弘道館仮開館式へ招待されて藩士への剣術指南をするなど、その期待に応えた。

こんなこともあった。弘化元(1844)年、斉昭が幕府から謀叛の疑いをかけられ、重臣の東湖らとともに謹慎処分が課せられた。藩内の権力争いが幕府を動かしたためによるものであるが、これは事実無根であり、潔白を明らかにしようとした武田彦九郎らが水戸を脱藩して江戸へ出てきたのである。彦九郎らは、弥九郎を頼った。事情を知った弥九郎は知人に匿いを依頼する。

一方、斉昭もそうした行動は、嬉しさの半面、幕府を一層刺激する迷惑な行為であり、彦九郎らを探索したが、なかなか見つからない。そしてその搜索を弥九郎にも頼ってきたのである。

弥九郎は、双方の気持ちが届いほど分かったで

歳の時、これまでほとんど行わなかった道場間の他流試合を技量向上のために積極的に行うようになった。併せて、20歳に成長した長男新太郎を全国修行に向かわせる。そして3年にわたる旅も終わりに近づいた1849(嘉永2)年6月頃、新太郎は長州藩の城下、萩に足を踏み入れた。

約2カ月の滞在について詳細は不明だが、長州藩の藩士は、新太郎の剣に全く歯が立たず、滞在中、藩士への剣術指南を要請したとみられる。というのは、新太郎が江戸へ戻った後、江戸藩邸に在る長州藩士の多くが練兵館に入門したからだ。

2年後の1851(嘉永4)年、長州藩士吉田松陰は、兵学を修めるため初めて江戸へ出てきた。この時、弥九郎、新太郎父子とも会っている。特に新太郎とつながりが強まり、同年12月に松陰が東北へ向かった際、新太郎は水戸や会津などの知人を紹介して松陰を支援している。ただし、この旅は、藩の正式な許可を得ない脱藩行為にあたり、翌年4月に江戸へ戻った松陰は、萩へ戻って謹慎するよう命じられた。



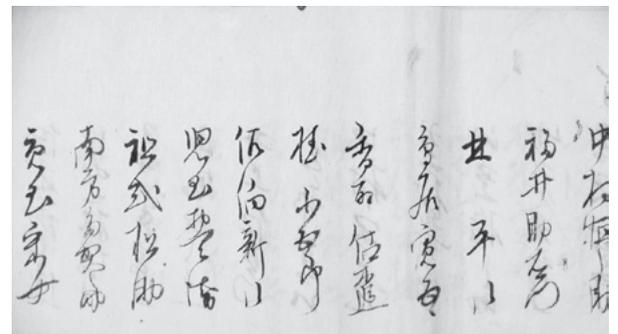
江戸時代に作られた台場のうち現存する第6台場。幕府から海防の任務を受けた江川英龍の側近として斎藤弥九郎は台場築造を助けた（氷見市教育委員会提供）

新太郎は再び長州藩に赴いた。今度の目的は、練兵館に長州藩からの精銳を受け入れるためであった。そして、萩の道場主から推薦された5人の藩士が新太郎とともに江戸へ向かった。このとき推薦には漏れたものの、私費での同行を希望して認められ、入門したのが桂小五郎であった。

ペリー来航、台場築造の役目受ける

桂小五郎は、1853（嘉永6）年の年初より練兵館に入門し、剣術や兵学、時には西洋砲術を学んだ。また吉田松陰は謹慎後、士籍剥奪というペナルティーを与えられた一方、遊学を許可され、再び江戸へ出てきた。ちなみに坂本龍馬もこの年初めて江戸へ出ている。そして同年6月、幕末最大の事件をそれぞれ江戸で迎えた。

その事件とは、黒船4隻の浦賀来航である。3日、日本へ来たペリー提督は、大統領フィモアの国書を受け取るよう幕府に迫り、9日に上陸貿易や遭難者の保護などを内容とする国書を幕府



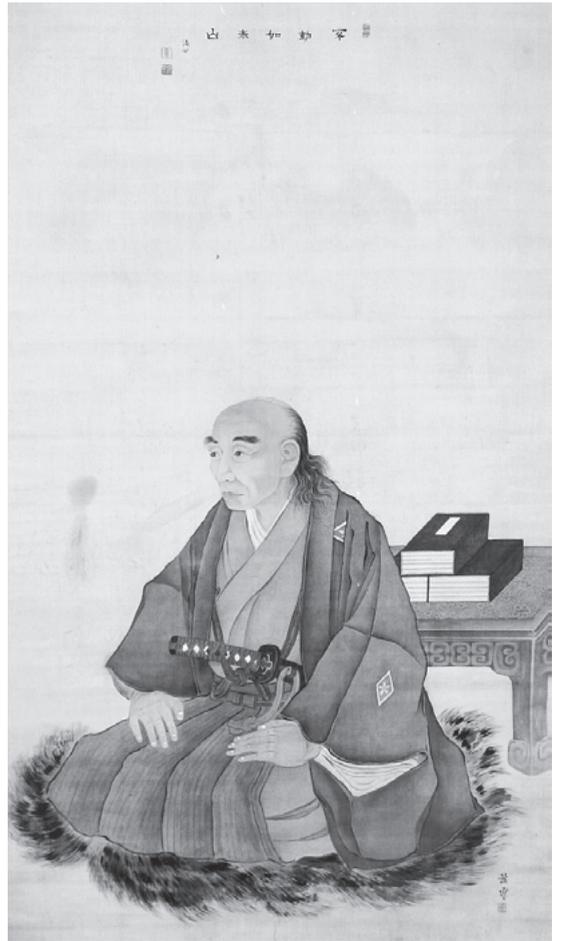
斎藤新太郎の「修行中諸藩芳名録」。中央に桂小五郎の名が見える（氷見市教育委員会提供）

側に手渡すと来春、再来航するので回答を用意しておくよう求めた上で、黒船を江戸湾内に侵入させるデモンストレーションを演じ、12日出航した。幕府は、これまで事前に黒船来航の情報は入手していたが、これといった対策をとっていなかった。だが、今回はそうはいかない。急きよ対応す

る必要に迫られた。そこで登用されたのが、数々の海防に関する提言を行っていた葦山代官江川英龍であった。勘定吟味役格・海防掛に任じられ、防衛の責任者の1人に登用された江川らに、江戸湾内の台場築造場所選定のための巡検が命じられた。江川は、弥九郎にも同行するよう求めた。そして桂小五郎も身分を隠し、巡検に参加した。様々な検討の結果、江戸湾最奥部の品川沖に12基の台場を一定の間隔で築造することとなり、江川がその設計を担当した。史料にはないが、弥九郎が台場築造の現場監督を行い、その弁当持ちとして桂小五郎も同行していたとされる。弥九郎は同時期、台場に設置するための大砲鑄造所である湯島での大砲鑄造御用掛にも任じられており、ペリー来航以降、多忙を極めた江川の仕事を側面から支えていた。

黒船再来航、退去交渉の役目受ける

ペリーの艦隊は1854（嘉永7）年1月、前



氷見から贈られた高遠藩から贈られた斎藤篤信齋62歳の肖像画（氷見市教育委員会提供）

に浜御殿（現・浜離宮恩賜庭園）に詰めた。結果的には、ペリー艦隊は神奈川（現在の横浜市神奈川区）沖へ進入したものの、江戸付近まで乗り入れることはなかったため、江川や弥九郎がペリーと直接対面する機会はなかった。

越前藩で参政を務めた中根雪江の日記『昨夢紀事』によれば、ペリー艦隊が江戸近くまで来た場合、江川と弥九郎が黒船に乗り込み、ペリーと退去交渉をし、それでも埒があかないときは、2人でペリーを刺殺するつもりだったという。

隠居後も將軍継嗣問題に尽力

江川は、日米和親条約締結後も一人多忙を極め

年の4隻から7隻に増強し、再び浦賀に入った。23日、江川は幕府より新たな仕事を命じられた。ペリー艦隊が万一、江戸近くに乗り入れした場合、船を出して退去させる役目である。この時まだ、台場は完成しておらず、江戸を守る最後の砦となる大役を任されたわけである。

江川は、退去交渉に備え、弥九郎ら部下とともに

た。4月に台場の一部が完成し、8月には備えつけた大砲の試射、11月には大地震と津波が発生して、対応に追われる。加えて葦山に鉄製の砲工場である反射炉の建設に着手した。しかし、過勞がたたり、1855（安政2）年1月、江戸で急死した。一方、藤田東湖は同年10月、江戸小石川の水戸藩邸にいたとき、大地震により建物が倒壊し、その梁の下敷きになって絶命した。

弥九郎は、大切な2人を相次いで失い、いかなる心境だったのだろうか。自らも1855（安政2）年、弥九郎の名と道場の経営を長男新太郎に譲り、隠居して篤信齋と名乗った。

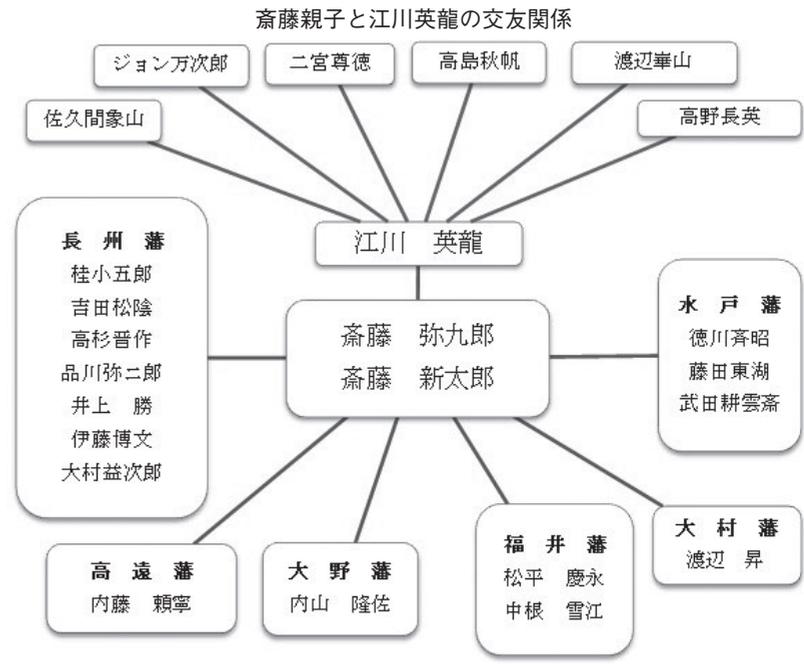
その後、幕府に將軍継嗣問題がおこり、福井藩主松平慶永（春嶽）は、一橋慶喜擁立のために、篤信齋に情報収集や南紀派側の懐柔工作を依頼した。南紀派とは、紀州徳川家の徳川慶福（のちの14代將軍家茂）を推す井伊直弼を中心とする一派である。一橋派が有利な状況もあったが、井伊が大老に就任したことにより逆転し、14代將軍に慶福、つまり家茂が就く。そして、尊皇攘夷派

の弾圧「安政の大獄」が始まると、水戸藩とのつながりが深い篤信齋は絶えず監視を受けるようになり、それなりの覚悟もしていたようだ。

1860（万延元）年の桜田門外の変以降、一気に攘夷熱が高まり、政情は風雲急を告げる。特に長州藩士は1862（文久2）年の品川御殿山にあったイギリス公使館の焼き打ちをはじめ、翌年5月、下関海峡で外国船を砲撃し、攘夷を決行した。

この後、会津藩と薩摩藩の公武合体派が長州藩を中心とする尊皇攘夷派を京都から追放した。八・一八の政変、さらに英、仏、米、蘭の4カ国艦隊が下関砲台を砲撃した下関戦争、長州藩が会津・薩摩などの藩兵と交戦し敗れる蛤御門の変と続く。

そして第1次長州征伐が発令されるなど長州藩は苦境に追い込まれるが、坂本龍馬による起死回生の薩長同盟を経て倒幕へとなだれ込み、ついに15代將軍徳川慶喜は大政を朝廷に返還した。このころ、隠居の身となった弥九郎こと篤信齋



は60歳を超え、代々木に開いた山荘で茶園を開いたり、現在の江東区内にある長州藩の砂村別邸を預かって藩士に剣の指導をしたり、また時間があれば釣りなどを楽しんでいた。一線を退いた身であり、このまま余生を送るつもりだったのだろう。

新政府の役人に就任

しかし、乱世はそんな篤信齋をそっとしては置かなかった。1868（慶応4）年、戊辰戦争で官軍が勝ち、江戸城も無血開城となったが、幕府への忠誠心変わらぬ旧幕臣らを中心としてつくられた彰義隊が上野に集結した。この時、篤信齋にその主領就任が要請されたのである。篤信齋は彼らの気持ちを十分理解していたとはいえず、官軍との交戦は朝廷に弓を引き、大義を犯すことになるとして、行動を諫めるとともに主領就任を固辞した。彰義隊はその後、大村益次郎率いる官軍にたつた1日で制圧された。

恐らく桂小五郎から依頼を受けたものと思わ

れるが、同年8月、篤信齋は新政府の役人に就いた。70歳を超えた徴士就任は、他と比べて極めて高齢である。会計官権判事、造幣権允、鉾山大佑等に相次いで任じられ、一貫して貨幣鑄造のための鉾山開発に携わり、大阪に在住した。この間の1869（明治2）年11月、建設中の造幣寮で火災が発生し、猛火の中に飛び込み、重要書類や道具類などを運び出した篤信齋は顔などに大火傷を負うというアクシデントにも見舞われた。

74年の生涯を閉じ、代々木に眠る

高齢による衰えは隠せず、1871（明治4）年春、大阪から家族のいる東京へ戻るが、引き続き鉾山業務に関わった。そして病を患い、同年10月24日に息を引き取った。

桂小五郎の日記には、篤信齋死去の翌日、「齋藤篤信齋昨日死去の事を承知せり実に余の恩人七十有餘不知の病を知ると雖も不堪愁傷也」と書きつづられており、その悲しみの深さが伝わって

くる。いったんはのんびりと余生を過ごすかのように見えたが、死ぬ直前まで、まるで老体に鞭打つようにして新政府のために働いた篤信齋。天皇を頂く新しい国づくりのため、命をかけて勤めるべきとの強い決意がそうさせたのか。はたまた戊辰戦争での多くの犠牲者を悼み、やむにやまれぬ気持ちからの行動だったのだろうか。

現在、篤信齋の墓地は、東京・代々木の福泉寺に家族らとともにある。墓石には没後36年が経過



東京・代々木の福泉寺にある齋藤弥九郎墓地（水見市教育委員会提供）

した1907（明治40）年に贈られた従四位の位記が彫られている。

加賀藩仕官の話もあった

こうして篤信齋は勤王の志士たちと深く結び付きながら幕末維新を駆け抜けたわけだが、実は加賀藩に仕える話もあったことを最後に触れておきたい。1857（安政4）年、のちに福沢諭吉らとともに遣米使節団の一員として渡米する砲術家の佐野鼎が加賀藩に仕える際、篤信齋も召し抱えることに藩主は同意していたのである。しかし、どのような事情があったのかは不明であるが、結局実現しなかった。もし、篤信齋が加賀藩に来て、その人脈をフルに生かしていれば、加賀藩は「明治のバス」に乗り遅れるようなことはなかったかもしれない。

ただ、篤信齋の弟の1人に三九郎がいて、彼は兄から剣術の指導を受けた後、当時西洋砲術の第一人者である高島秋帆から砲術を学んだ。そし

て、加賀藩の重臣青山将監の陪臣となり、1846（弘化3）年に大砲を鑄造、打木浜でその試射を行うなど藩の西洋砲術導入のきっかけをつくり、海防整備に大きく寄与した。

剣豪特集でありながら剣術の話が少なくなったが、幕末維新という特殊な時代に生きた剣豪は、ほかの時代とは違う役目を課せられる宿命にあつたともいえるだろう。その意味で、篤信齋こと弥九郎は能力と人脈という「剣」で激動の社会そのものを相手に戦った才長けた戦士であった。

参考文献

『洋学史研究』第22号「加賀藩における洋式兵学者の招聘と佐野鼎の出仕」松本英治氏
『幕末偉人斎藤弥九郎伝』大坪武門著 京橋堂書店
『剣客斎藤弥九郎伝』木村紀八郎著 鳥影社



小谷超（おたに・すすむ）
1967（昭和42）年氷見市生まれ、同市在住。
氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課主査。